赤米ニュース

第 291 号
（2021 年 6 月 30 日）

東京赤米研究会

〒186-0005　東京都国立市西 3-7-29 アゼリア国立 2 -101　長沢方（TEL042-577-6855）

6 月の赤米作り---------- 2324
おしらせ----------2326
おたより----------2327
国分寺市の稲作農具（Ⅱ）----------長沢利明 2327
表紙解説：江戸東京ゆかりの植物⑥―サクラソウ―　---------- 2330

［2021 年版赤米栽培マニュアル］

6月の赤米作り

●６月の赤米作りのポイント

初夏の種まきから、はや１ヶ月がたちました。皆さんのお宅の赤米稲の赤ちゃんの様子は、どうですか？。きちんと芽が出ましたか？。すくすくと早苗が順調に育っていますか？。駄目だったという方々は、今からもう一度やり直してみて下さい。決して遅すぎるということはないですから、大丈夫です。順調にいった方々の場合、もう赤米稲の苗はすっかり大きくなっていることと思います。初夏の日差しを十分に浴びて、これから赤米稲はもっともっと大きくなっていきます。今月は苗の成長を、さらに促進させてやるための、環境作りという点に重点を置いて、作業を進めていくことに致しましょう。

●ガス抜きパイプの設置

初夏から盛夏の頃にかけての、ミニ田んぼの土中ではこの時期、有機物が分解してガスが発生しやすくなってきています。それは土中の微生物の活動が活発化して、肥料や土壌中の養分を、活発に分解し始めるためです。その結果、土中には微生物の活動によって生れた炭酸ガスやメタンガスが溜まっていきます。ガスが地中に溜まったままですと、稲の苗の根を傷めてしまい、急速に早苗の成長がにぶったりすることがあります。そこで、そのガスを抜いて空気中に放出させてやるための通気パイプを、土の中に立ててやるとよいのです。面倒くさいと思われる方々は省略して下さってもかまいませんが、できることならやっておきましょう。

パイプは塩化ビニール製の管でも、ゴムホースを切ったものでも、何でもかまいません。節を抜いた竹でも、サランラップやファクシミリ用のロール紙の芯でもいいですし、要するに太い管になっていれば何でもよいのですが、トイレットペーパーの芯では、やや短か

図３　ガス抜きパイプの設置法

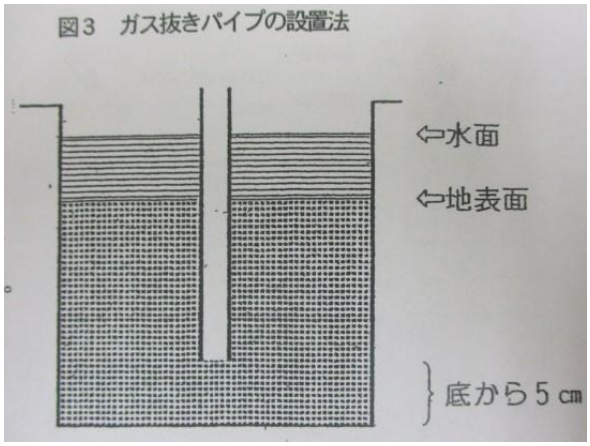
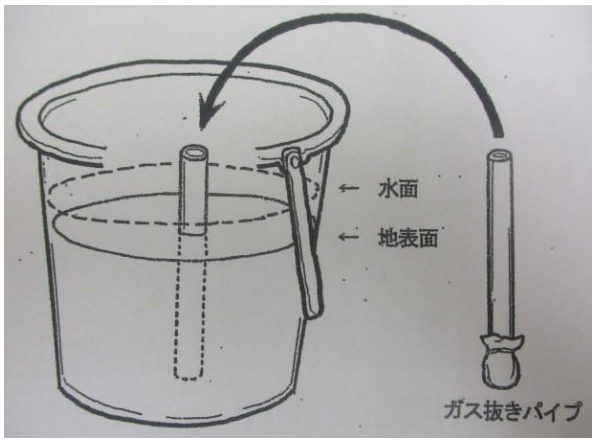


図４　バケツ栽培とガス抜きパイプ
（バケツの中央に１本のパイプを立てる。プランターの場合は２本）



すぎますし、強度も落ちるので不適です。

ガス抜きパイプは、バケツの場合は真ん中に１本、プランターの場合は２本ほど立てて下さい。立て方は図３～４のようにし、パイプの下端が容器の底から少し離れるようにして、その上端が水面からわずかに飛び出すような形にセットします。パイプの中に水が満ちていてもかまいませんが、土が詰まっていてはいけません。中が空っぽになっていませんと、そこからガスが抜けませんので、気をつけましょう。

●苗の成長と水位の調節

６月のミニ田んぼに育つ赤米稲の早苗は、図５･写真５のような状態に成長しています。苗の草　丈は約 15～20 ㎝ほどに伸びているはずで、すでに５～６枚の葉が出て、早くも分けつを始めている株もあるはずです。

種まき・発芽直後の赤米稲の芽は、細い針状をしていますが、それが子葉で、双子葉植物のように双葉ではありません。稲は単子葉植物ですので、子葉はつねに１枚です。発芽後、２～３日しますと、子葉の先端から本葉

図５　苗の様子

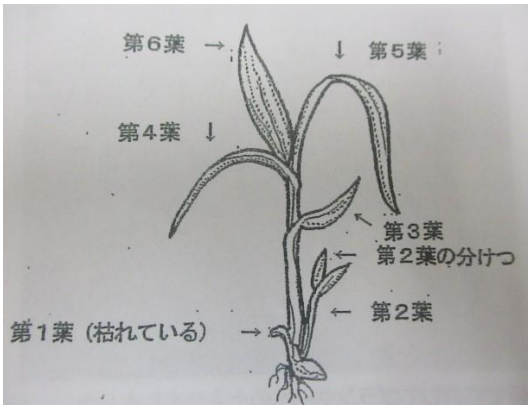


写真５　成長した赤米稲の苗

があらわれてＹ字状になりますが、それが第１葉です。第１葉はその後、枯れてしまいますが、第２葉・第３葉が次々に出てきて、６月中旬には第５葉・第６葉までが出揃い、葉先が長く伸びていきます。早苗の丈が 10 ㎝を超えた頃からは、苗の成長に合わせて少しずつ、ミニ田んぼの水位をしだいに深くしていきます。

その結果、ミニ田んぼはいかにも田んぼらしくなっていきますが、水の深さは苗の丈の３分の１ぐらいに保ちます。苗が 15 ㎝ほどに成長した時点での水深は、およそ５㎝ということになりますが、その後はいくら苗が大きく伸びても、水深 10 ㎝までにとどめて下さい。あまり深く水を入れる必要はありません。ガス抜きパイプの高さも、それに合わせて調節します。水面からほんの少し飛び出たくらいの高さが適切です。

苗には十分に日光を当て、梅雨時シーズンを迎えましょう。梅雨が明けて夏になれば、赤米稲は急激な成長を開始します。それは本当に驚くばかりの成長ぶりで、タケノコのようにぐんぐんと苗が伸びていきます。楽しみですね。それでは７月にまたお会い致しましょう！。

おしらせ

●287 号・290 号の訂正

本誌 287 号 2296 頁で、胡桃堂喫茶店の「赤米ブレンド珈琲」を紹介しましたが、同店からのご指摘によると、このコーヒーには赤米は用いられていないとのことでした。訂正してお詫び申し上げます。また、290 号 2320 頁の下表のタイトルは「令和 2 年度赤米セミナーレ活動報告」とありますが、「令和 3 年度赤米セミナーレ活動計画」のまちがいでした。これも訂正させていただきます。

●赤米プロジェクトの勉強会

本年 5 月 8 日（土）、国分寺市の「胡桃堂喫茶店」において、国分寺赤米プロジェクト（チーム赤米）の勉強会が開催されました。市内各地そして青梅市内の水田で大規模な赤米作りをおこなっているチーム赤米ですが、今年の農作業が本格的に始まる前に一度全員が集まり、赤米についての基本的な知識を学んでおこうということで、今回の勉強会の開催となりました。約 20 名のメンバーが出席しました。ゲストとして東京赤米研究会代表の長沢利明さんを招き、活発な質疑応答がなされました。「武蔵国分寺種赤米」の発見にまつわるエピソードや裏話なども披露され、深夜に至るまでおおいに議論が盛り上がりました。

活発な質疑応答がなされました

●国分寺九小で赤米種まき

国分寺市の恋ヶ窪公民館で赤米作りをおこなっている「赤米セミナーレ」では本年、市立第九小学校での 4 年生 2 クラスの児童らによる校内での赤米栽培を、指導することになっております。その手始めとして本年 5 月 21 日（金）、プランターへの土入れ・種まき作業が九小にておこなわれました。あいにく雨模様なので、教室内での作業となりましたが、班ごとに割り当てられた大型プランターに児童らが土を入れ、水浸した赤米の種子がまかれました。セミナーレからは大石岳人代表以下、4 名が出席して、作業の指導をおこないました。赤米稲の特徴や歴史についての、簡単なレクチャーもなされました。児童たちからは活発な質問が出され、「どんな味がするお米なんですか？」、「何で赤い色をしているんですか？」といった難問に、答える側もた

皆で協力してプランターへの土入れをしました

じたじでした。ご協力をいただいた九小校長の矢島英明先生には、心から深く御礼申し上げておきます。

おたより

●種まきが中止に（冨村隆子）

先日は赤米セミナーレの総会にお越しいただき、有り難うございました。土作りのご指導を賜り、大変感謝しております。その後まもなく緊急事態宣言発令となり、公民館での活動の全てが中止となりました。従って種蒔きも出来ない事となり、取り敢えず各自自宅栽培だけ始めて頂く事として、種籾を配布致しました（4/28：東京都国分寺市）。

●『赤米ニュース』に感謝！（野沢森生）

『赤米ニュース』第289号、お送り頂き有難うございます。早速読ませて頂き、まずは土と水とを時間をかけてなじませるように、とありました。『赤米ニュース』はタイムリーな栽培マニュアルでもあり、全くの初心者にはとても参考になるもので、大変感謝しております（5/1：東京都国分寺市）。

国分寺市の稲作農具（Ⅱ）

長沢　利明

1　施肥作業と農具・つづき

秋の雑木林に降り積もったコナラ・クヌギなどの落葉広葉樹の枯葉のことをクズ（葛）、それを掻き集めることをクズハキ（葛掃き）、そのために用いられる大きな竹籠をクズハキカゴ（葛掃き籠）、クズハキをおこなう森林のことをクズヤマ（葛山）と称することは、他市町村と同じである。

市内8ヶ所にあった新田集落の場合、鰻の寝床のように細長い短冊型の地割で区切られた家々の屋敷地内の、一番奥まった所に各戸の持山があって、それがクズヤマなのであったが、俗にヤマ（山）と呼ばれていた。家々のヤマは横一列に連なって帯状となり、武蔵野新田独特の景観をそこに生み出していた。一方、新田村ではなく古くからあった本村（国分寺本村）・恋ヶ窪の二集落では、村に付属するクズヤマをあちこちに持っており、ほとんどが私有林で共有林や入会地というものはほぼ存在しなかった。旧恋ヶ窪村のかつてのクズヤマの一部が今の「エックス山」であって、昔の里山林の景観とその生態環境とが、今も良好に残されている。

一方、本村の場合は、集落北方の丸山と呼ばれた丘陵上にもっとも広いクズヤマがあった。現在の殿ヶ谷戸庭園の東側の、旧別荘地地区へとつながる一帯の傾斜地がそれで、今では完全に市街地化されてしまっているが、戦前はさかんにそこでクズハキ作業がなされていた。この丸山は俗に「クズヤマ十町」とも呼ばれていたが、実際には10町もの広さはなく、しかも家ごとの持山に細分化されていた。丸山にクズヤマを持たぬ家々は、持っている家々に対価を支払ってクズを掃かせてもらうほかはなかった。丸山以外では、西にやや離れた黒鐘の周辺にクズヤマを持つ家が結構あり、そこは本村に帰属するクズヤマなのであった。現在の府中病院の南側、黒鐘公園に隣接する広い段丘斜面およびその崖下にあった平地林がそれで、今もその雑木林の一部が残されている。

クズヤマの雑木林には、コナラ・クヌギを

中心とした落葉広葉樹が生えている。15～16年に一度は皆伐しなければならず、伐採された木材は木炭や薪として利用された。皆伐跡地の切株からは、樹木の新芽がまた生えてきて、いわゆる「萌芽更新」・「切株更新」の形で森林が再生されていくのであるが、その際にクズハキや薪炭利用のために役立つコナラやクヌギは残し、利用価値の低いエゴノキ・クリなどは低木のうちに刈ってしまう。こうした選別的淘汰のことを、モヤワケと称していた。クリは材が柔らかくて軽いため建材としては不適で、鉄道の枕木くらいにしかならないし、薪としてイロリで燃やすとはぜやすく、灰が飛ぶので薪炭材としての利用価値も高くはない。逆にすぐれているのは、やはりコナラ・クヌギなのであって、薪材としても製炭材としても、もっとも適している。

なお雑木林の中には時折、アカマツやスギなどの針葉樹が生えてくることもあり、他家のヤマとの境界の印として、そのまま残しておいた。戦時中は国の命令でアカマツの根を掘り、松根油を採って供出していたこともあったが、松根油はどんなに低温でも凍らず、高空を飛ぶ軍用機の燃料となった。

さて、クズヤマで掻き集めた大量の枯葉を、家まで運搬するために用いられた竹籠がクズハキカゴ（葛掃籠）と呼ばれるもので、子供が3人くらい中に入れるほど大きな竹籠であった（写真1）。籠には肩当て帯が付いており、背負うことができたが、あまりに籠が大きいので、これを背負う人を背後から見ると人の姿が隠れてしまい、大きな籠に二本足が生えて歩いているかのように見えた。

クズヤマの枯葉を熊手で掻き集め、この籠

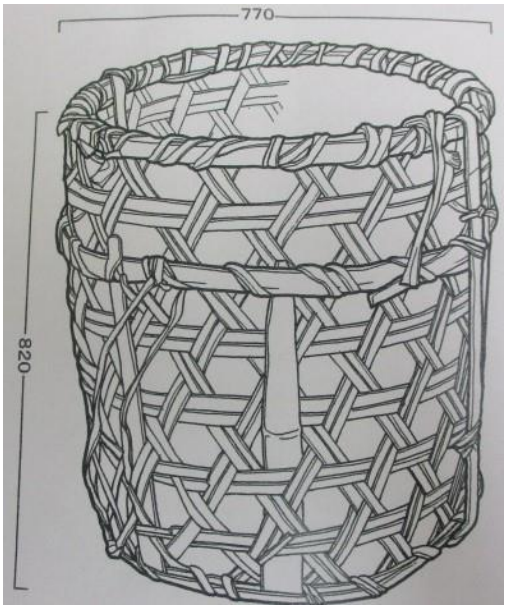
写真1　畑に並んだクズハキカゴ（清瀬市中里）

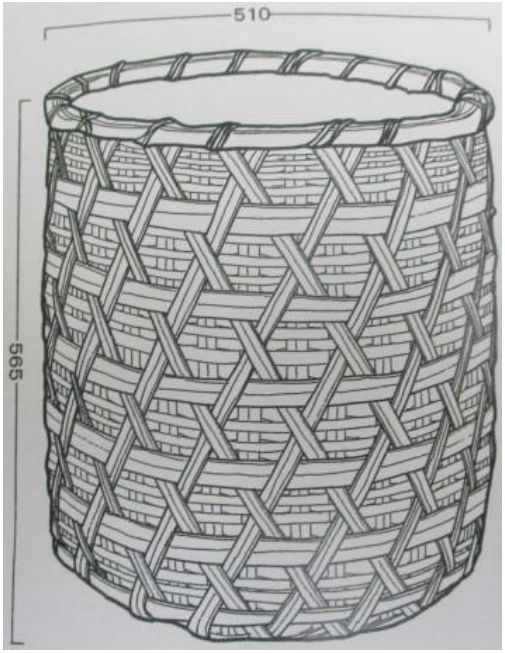
の中に詰め込むと、籠はすぐに満杯になってしまうが、隙間だらけなので見た目ほど枯葉は中に入っていない。そこで農民は籠の中に自ら跳び込んで足で枯葉を踏み固め、徹底的にそれを圧縮する。すると、かさが減るので、さらにそこに枯葉を投入し、また足で踏み込むという作業を繰り返すと、かなりの量の枯葉が採取されたことになり、それを背負った時の重量は相当なものとなる。こうして家まで背負い、運ばれた大量の枯葉は堆肥置き場に積み上げられ、時折は風呂の残り湯などを振り掛けて切り返しをおこない、春までに腐熟させることになるが、枯葉の山は枯草菌の力で自然発酵して熱を発生し、冬でも湯気をあげて、降雪時にはそこだけ雪が融けて積もらなかった。こうしてできあがった堆肥のことを、ツクテと称した。

図1は市内のクズハキカゴの実測図であるが、上が本村（現在の西元町）、下が榎戸新田のものである。本村のものを見ると、側面に8本の割竹を回しており、これをビネ（捻）とかベネーとか呼ぶ。8本のビネを持つ8段式の籠なので、ハチホンベネー（八本捻）・ハチダンビネー（八段捻）などともいい、口径770㎜・高さ820㎜を測る最大級サイズのク

図1　クズハキカゴ

注）上は本村、下は榎戸新田のもの［長沢, 2020：p. 29］。





ズハキカゴであった。一方、榎戸新田のものは7段式でやや小さく、口径510㎜・高さ565㎜ほどとなっているほか、胴部が二重構造になっているのが特徴である。つまり外側が六ツ目編み、内側が平編みの造りで、籠の中が外から見えないため、ドロボッカゴ（泥棒籠）などと呼ぶ地域もある。

表2は周辺地域のクズハキカゴの調査事例を比較してみたものである。籠のサイズはいろいろで、決して一様ではないが、市内のそれは概して大型・巨大であって口径は800㎜近くに達し、高さは900㎜を超えるものもある。容量は実に370～380ℓにまで達する。

ところで、クズヤマでのクズハキ作業をおこなうには、枯葉を掻き集めるための熊手箒が必要である。熊手は竹製が多いが、金属製のものもあり、サイズも大小さまざまで、クズハキがなされなくなった今日でも、庭の掃除や耕地の除草作業などによく用いられている。図2は榎戸新田と内藤新田の熊手の実測図であるが、その全長は大型のもので1500～～1600㎜、小型のもので760～1100㎜ほどと

表2　各地のクズハキカゴの計測値

調査地	段	口径：㎜	高さ：㎜	容量：ℓ
国分寺市戸倉	8	750	850	375.3
〃　〃	8	720	920	374.4
〃　〃	7	500	920	180.6
〃　本村 1)	8	770	820	381.6
〃　榎戸新田 2)	7	510	565	116.4
狛江市和泉 3)	7	580	620	163.7
国立市谷保	8	782	835	400.8
〃　〃	7	525	515	111.4

注：1）は図1の上。2）は図1の下で長沢, 2020：p. 29による。3）は米村, 2020 a：p. 92による。

なっている。上段右は金属製の熊手であるが、それ以外はすべて竹製であり、14本爪もしくは18本爪となっていて、爪の数は必ず偶数となり、竹製でも金属製でもそれは変わらない。

陸田・水田の肥料はもちろん、堆肥だけではない。下肥もまた重要である。市内の農家は大量の糞尿を入手するために、町場の非農家世帯と懇意になり、何軒もの得意先を確保してきたのであって、汲み取った糞尿を樽に詰め、大八車に積んで村へと持ち帰った。これをコエシキ（肥曳き）という。得意先にはその謝礼として、大根などの野菜を届けることもあったが、それは農家に取っては、必要不可欠な肥料原料を提供してもらうことへの対価としての謝礼であった。いわば買い手市場なのであったが、いつしかそれが非農家側に取っては農家が糞尿を処理してくれるありがたい存在となり、非農家の側から謝礼を支払うようになって、両者の立場が逆転していくのである。

コエシキに用いられるコエオケ（肥桶）は通常、約30ℓ入りの専用桶がよく用いられ［武士田, 1997：p. 127・増田, 1992：p. 86］、それを天秤棒（図 3）で担いで運搬したわけなのであるが、残念なことにそのコエオケは市内に今、ほとんど残されていない。農家の代替わりや家屋の新築にともない、物置の中の古い農具がどんどん廃棄されていくのは仕方のないこととはいえ、まっ先に処分されるのは「汚い」というイメージをともなうコエオケなのである。そういうわけで、ここにただの１点もその実測図を掲げることができないのは、残念なことではある。しかし、そのコエオケから下肥を汲み取るための柄杓については、内藤新田に１点だけそれが残っていたので、図４に掲げておこう。見ての通り、柄の部分が失われているが、先端の桶部分は残っていて、このような道具を用いていたことがわかる。

農家の生活と農業技術の近代化を通じ、堆肥も下肥もいまや用いられなくなった。化学肥料の普及によって、堆肥作りもなされなくなり、里山林はその利用価値が失われて荒廃が進んだ。かつてそこにあった持続可能性に支えられた農業の姿を、その農具の実態から、私たちは知ることができる。

2　耕起作業と農具

さて、ここからはいよいよ春の耕起作業が始まる。まずは稲作農業のおこなわれる農地の実態を、簡単に見ておかねばならない。

（つづく）

［表紙解説］

江戸東京ゆかりの植物⑥―サクラソウ―

日本特産の在来種のサクラソウは、まことに迫力のある花の咲き方をする。花の色は園芸種の西洋サクラソウのような、うすぼんやりとしたピンク色ではなく、濃いショッキング・ピンク色で、花もずっと大きい。秩父の山中から種子が川に流され、荒川下流の河川敷に定着して、現在の北区浮間ヶ原や荒川区尾久原に、広大なサクラソウの自生地が形成されることとなった。初夏の開花期には河川敷がピンク一色に染まり、江戸市中から多くの花見客が集まった。『江戸名所花暦』という近世歳事記には、サクラソウ見物の行楽客でにぎわう荒川原の様子が、詳細に描かれている。そこから市中に持ち込まれたサクラソウは、江戸の園芸マニアらの手で改良が加えられ、何百種類もの園芸品種が生み出された。荒川河川敷のサクラソウ自生地は、河川改修によって昭和初期に消滅してしまったが、北区の浮間ヶ原には現在、立派な桜草園が整備され、在来種のサクラソウが手厚く保護されていて、そこをおとずれれば実に見事な花の群生を見ることができる。